ハックが越える社会のハードル
——*adventures of Huckleberry Finn*——

阿　部　壮太郎

序論
第一章　白人社会
第二章　筏の上から
第三章　ハックとジム
結論

銃と釣針。自分の身を守るものと、最低限食料を確保できるもの。それだけあればハックは満足に生活は出来るであろう。誰にも知られることのない々自適な生活ルハックの望んでいることは、それだけである。

彼は森の小屋から逃亡する時に、自分があたかも殺されたように、入念に擬装した。それは彼の髪の毛を血の塗った斧につけ、喉え叩き切った豚に上衣を着せて川に投げ込むという方法である。この豚の象徴　するものは、今まで白人社会の中で生きてきた、ハック自身でなかろうか。

彼は〝conscience〟という言葉を多く使う。この言葉は、白人社会で彼が学んだ「価値観」と言い換えても良い。そして「僕の顔を打つ神の御手」とは、単に白人が勝手に作り上げた偶像に過ぎないのではないか。

〝All right, then, I'll go to hell〟彼はそう言い切る。まさにしがらみよりも、自分の気持ちに忠実に生きるようと決断したことを示している。もうハックは迷うことはない。

ジムにとって、ハックは一番信頼する白人である。しかし、彼の心とは裏腹に、ハックはジムを騙そうとする。ジムは、ハックを白人の少年であるばかりではなく、自分の遠く離れた子供をも投影している。それだけに、彼の怒りは大きい。

ジムは疲れたように筏の小屋に引きこもる。それに対するハックの反応はどうであろう。もし、彼が計算高い少年であったならば、ジム近くの町で売ってしまっていただろう。しかし、ハックはそんなことはしなかった。彼は黒人奴隷ジムの足にもスをしてでも二人の関係を取り戻そうとする。

ハックとジムは、ミシシッピーを筏で旅する。その中で二人はあたかも親子のような関係をもつ。それは、お互いに親子関係の愛情に枯掲していたのではないだろうか。

ハックは殻を破り捨てた。この殻とは、既成の白人社会であったり、白人が策き上げてきた文明であったりする。これからのハックルベリィ・フィンは、人種の壁を越えた人間となって行くのである。

（指導教員　中村　敦志）

『ねじの回転』におけるHenry Jamesの意図

林　　幹久

序論　　第三章
第一章　　第四章
第二章　　結論

Henry James の『ねじの回転』(The turn of the Screw) には、実に多くの謎がかくされている。ここでは、主な謎を解き明かす事で作者の意図を探る。

先ず、この作品の中で最も重要で大きな謎となるのは、この物語の中で幽霊は本当に出てくるか否かと言う事である。この疑問には三通りの考え方があり、一つは幽霊出現説、二つ目は幻覚説、そして三つ目は幽霊・幻覚折衷説である。

幽霊出現説は家庭教師の見た通り、実際に幽霊は現れ、子供達を悪の世界に引きずり込もうとしているという考え方であり、最も正直にこの物語を読んだ解釈の仕方である。

二つ目の幻覚説は、この物語が全て家庭教師の視点から作られていることに着目し、家庭教師の言動の名から精神的な異常も発見したものであり、彼女の見る幽霊は全て幻覚であり、子供達を恐怖させたのは幽霊ではなく、家庭教師の狂気であったとする説である。

そして三つ目の幽霊・幻覚折衷説は、前述の2つの説のどちらにも正しい所があり、幽霊が実際に出ている場面と幻覚を見ている場面とが両方存在するという考え方である。

次に問題として上げるのは、幽霊として現れる2人の男女の死の真相である。この2人の死は謎に包まれており、明らかな証拠となるものがないのである。しかし、子供の内の1人、マイルスがクイントの死に関わるものと思われ、ジェスルの死因は、グロース夫人の言葉から読みとれるのである。

そして次はマイルズの退校処分である。突然マイルズは学校を退学になる。これも明らかな理由が書かれていないのであるが、生前子供達に悪影響を与えたピーター・クイントの存在がそこにあると思われるのである。

最後に、マイルズの死の真相であるが、これは、幽霊の出現を読む者がどの様にとるかで変わってくるという、非常に複雑なものである。

結論として、この作品には決まった結論がないのである。全て読む者の見方によって決まる為、どの考えが正しいというのではない。それが作者の意図といえるのである。

(指導教員　中村　敦志)

イヌの目からみた人間社会の批判
――『白い牙』と『野生の呼び声』――

高　橋　康　彦

ジャックロンドンの作品は、大きく２つのタイプに分けられる。ひとつは社会主義がもとになっているプロレタリア文学の作品。もうひとつは、適者生存、環境に支配されて生きている人間や動物を描いた自然主義文学の作品である。私が題材として選んだ作品は『白い牙』と『野生の呼び声』である。このふたつの作品は、自然主義文学に属する。そして彼の作品のうちの最高傑作といわれている。

どちらの作品も環境によって順応し発展していく犬やオオカミを描いている白い牙では、野生の本能をもったオオカミ犬が野生の地の北国から飼い犬としての南国生活へと適応していく様子、『野生の呼び声』では、犬が全く逆の発展をしていく。それは、南国で暮らしていた飼い犬が、北国へ渡ってやがて野生化していくという物語である。

これらの作品の中には、社会の調刺、批判が潜んでいる。その背景となっているのは、1890年代の経済恐慌の時代。そしてもうひとつは、1896年カナダで金鉱が発見されてからおこったゴールドラッシュである。作者は1876年生まれで、このふたつの大事件を直接、体験していた。経済恐慌のときは、奴隷のような生活を送り、ゴールドラッシュのときは、自ら一獲千金を夢みて北国へ旅だったということだ。そしてこのことが貴重な体験となり彼の作品執筆に大いに役立っているといえる。このことをふたつの作品の中でイヌの目を通してアメリカを調刺する作品となっている。

まずこの作品を解釈するうえで重要なものは、「掟」というキーワードである。そして「掟」はだんだん変化していく。そのことは、犬が新しい環境に適応していっていることを示している。白い牙では野生の掟から飼われることによって人間に対する被支配の掟へ変化し、野生の呼び声ではその逆である。これらの掟は、そのまま人間社会に置きかえることができる。それは、犬を被支配階級の人間、犬を支配する人間を労働者を支配しているひとにぎりの人間とにである。経済恐慌の時代には、失業者があふれたように、もっとも打撃をうけるのは、いつも社会的弱者であった。そして豊かな者はより豊かに、貧しい者はさらに貧しくというように貧富の差が大きい時代である。そのような人間社会、社会構造を批判した作品である。

（指導教員　中村　敦志）

『老人と海』にみられるヘミングウェイとアフリカ

細　木　亮　宏

この『老人と海』は、キューバに住む孤独な老漁夫の話である。八十四日も魚が一匹も釣れない不良が続く。しかし、老人はあきらめることなく、漁を続けるのであった。この孤独な老漁夫、サンチャゴのそばで、ビールをおごったり、釣の餌の心配をしたりして何かと世話をやいていた少年、マリーリコがあるが、一匹も釣れない日が四十日もつづくと、少年の両親は、少年を他の船で働かせる。しかし八十五日目、残り少ない餌に巨大なカジキマグロがかかる。この大漁との死闘を四日に渡って繰り返した後、老人は勝つのだが、船にくくりつけられたカジキマグロは、帰途、サメに襲われて、寄港した時には骨だけになってしまうのである。これは勝利、敗北のどちらを意味するのであろうか。

海洋小説、ハーマン・メルヴィルの『モービィ・ディック』と『老人と海』は、登場する人物やすばらしい海の情景描写、人間の深遠な考察、海での漁の様子などこと細かに具体的に表現されている。どちらも対のようになっていて、当然、ヘミングウェイがメルヴィルの『モービィ・ディック』を意識して『老人と海』を描いたのである。構成で違っているのは、『モービィ・ディック』が最後、死に向かっているのに対し、『老人と海』は最後、勝利、生に向っているという点だけである。

永遠の敗北と新しい眼にみられる闘志、老人の舟の帆は、永遠の敗北を象徴していた。また、舟だけではなく、老人と老人のモノすべてが古いのである。しかし、眼だけは新しく闘志に燃えていた。

老人は何度もアフリカやライオンの夢を見るのである。これは老人が若い頃、アフリカを中心に活躍していたことを振り返っている。ヘミングウェイ自信もアフリカを受していた。これは、彼の二作目の長編『武器よさらば』が大成功し、これが劇化、映画化されて多額の収入を手に入れ二度目の結婚をし、妻とアフリカを旅行、この頃がヘミングウェイの絶好調の時期であったようだ。

この作品は、ピューリッツァー賞やノーベル文学賞など数々の賞を受賞をし大成功を収めるが、それまで一時的、作家として不振が続く。この不振が「不漁」や「永遠の敗北」である。しかし成功を収めたいという願望が、「闘志に燃える新しいめ」や、『モービィーディック』が最後死に向っているのに対し、この作品では勝利、生に向っている点などに現れているのである。成功への予感や意識ではないだろうか。このように、ヘミングウェイ晩年のこの作品は、彼の波乱に満ちた「生涯」と思わせるのである。

（指導教員　中村　敦志）

「眼」の中で生きた女性
――「エミリーに薔薇を」――

大　崎　麗　華

この物語は，アメリカの作家であるウィリアム・フォークナーの「エミリーに薔薇を」という短篇小説である。概略は、町を代表するグリアソン家の生まれである主人公のエミリーは、異性面では父親にすべて拘束されていた。やがて父親は死に、その拘束から解放されたエミリーは、舗装工事のため北部からやって来たホーマー・バロンという男と知り合い、親しくなるのである。しかし、それも束の間、彼は町の人気者で彼女の思い通りにならず、永遠に彼女の側に留めておくために彼を毒殺し、その死体と長年一緒に暮らし、最後には74歳で孤独な一生を終えるというものである。

一見、単純に思えるこの物語は、わずか20ページの中で時間的配列や構造などが複雑に入り組み、またエミリーを中心として起こる様々な問題などが凝縮されているのだ。その問題とは、目的をいわずに毒薬を購入したり、ホーマー・バロンとのことや屋敷から悪臭を発生させて人々を騒がせたりしたこと、そして10年前の税金免除の効力が今もあるとし、頑な態度を示すというエミリーの言動である。

これらについて語っているのが、町の人々の「私たち」であり、エミリーの生きざまを目まぐるしく視点を変えながら観察しているとともに、エミリーの死後、彼女に対する弔いの気持ちから人々はこれらの出来事を時間的なことにはとらわれず、回想しているのだ。しかし、彼女を観察している「私たち」はその時々に応じて年齢、性別、階級などが異なり、また構成員も変化するのである。そしてその人々の「眼」は、常にエミリーあるいはグリアソン家に注がれていた。彼女の父親が死に、孤独で貧乏だと知ると同情の余地ができたと喜ぶ。またホーマー・バロンと親しくしている彼女を見て、気を紛らわすものができてよかったと最初は喜ぶのだが、「北部人の日雇い労働者」をまともに相手にするはずがないといい「かわいそうなエミリー！」と噂し合う。その後、「町の不名誉だ」と非難し、二人が結婚しそうになると牧師を説得にあたらせ、それが無駄だとわかると今度は彼女の親戚を呼ぶのである。逆に、結婚が確定的だと悟ると、エミリーの味方となり親戚を追い返そうという気になる。ホーマー・バロンの姿が見えないと拍子抜けしたり。予期していたことだという。終には、エミリーが毒薬を買うと、ここまで没落した彼女の自殺も当然だと噂するのだ。このように、エミリーに対して向けられる人々の「眼」や、時の流れによって変化する人々の「心情」がこの物語の土台となって入る。

一つの世代から次の世代へと移行していくエミリーは、この町では「一つの伝統、一つの義務、一つの厄介者」であった。時にはこの町の歴史や運命を背負わされ、時には様々な問題を引き起こし、邪魔者や厄介者となった彼女は、父親の「眼」からは解放されたが人々の「眼」からは解放されなかった。

このような一生を送った彼女に対して、作者であるフォークナーは敬愛の情と励ましの意味を込めて、彼女に薔薇を送りたいという気持ちから「エミリーに薔薇を」という題名がつけられたのである。

（指導教員　中村　敦志）

生への執念
――『怒りの葡萄』――

大沼　央

私は、ジョン・スタインベックの怒りの葡萄(ぶどう)を読んで、人間の生きることへの執念を感じました。小説の内容は、1930年代のアメリカが舞台であり、不況の中仕事をさがしてオクラホマからカリフォルニアまで行ったジョードー家を中心に民主主義の矛盾を描いている。

読み終えての感想は、人間の生活力はすごいものであるということである。どんなに食べ物がなくても、仕事がなくても、どうにかして生きて行こうとする。これが人間という生き物である。作者であるジョン・スタインベック自身も生活難であったために、よりリアルに当時の状況が私に伝ってきた。

また、この小説の最大の特徴は、奇数章と偶数章では内容がちがうということである。奇数章は事実、偶数章はドラマというようにわかれているのである。これにより効果的に事実とドラマをミックスすることに成功している。

民主主義においての貧富の差は深く考えさせられることである。急激な社会変化によりとり残された人々は、富を持っている人間に雇われる。そこでは、低賃金、重労働などで人間として扱ってもらえない。そんな中で賃上げのための組合運動が起こるというのは自然なことである。この組合運動も自分たちが生きていくための起こしたことである。人々は生きるための怒りを感じるのである。その怒り一つ一つが葡萄のように実り収穫の時を待つのである。

タイトルである「怒りの葡萄」の葡萄は本編には少ししか出てこない、しかもドラマとしてではなく一つの農作物の育て方の例としてである。したがって葡萄はスタインベック流でいくと怒りを表現する物である。カリフォルニアに集った多くの移民たちの怒り一つ一つが葡萄の一房一房であると思われる。それが時がたちにつれてしだいに育って大きくなっていくのである。そして「怒りの葡萄」が収穫される時こそストライキが起こるということであろう。生きて行くために人々は怒りを爆発させるのである。また怒りの他にも楽しさという感情がある。どんなにつらい時でもどこかに楽しさを見つけることができる。これが人間という生き物である。人間は先に書いた通りいろいろなことを考えて、どのような状況でも生きて行けるのである。ジョン・スタインベックは、このことを労働問題をまじえ、「怒りの葡萄」を通して私たちに伝えたかったのではなかろうか。

（指導教員　中村　敦志）

自殺の心理

――「バナナフィッシュにうってつけの日」――

奥　崎　千　鶴

この作品は、サリンジャーの自選短編集『ナインストーリーズ』の中の一篇である。舞台は1948年のアメリカとなっている。主人公シーモアとその妻が、旅行でフロリダへ来ているのだが、シーモアは突然自殺してしまう、というストーリーである。どうして突然自殺をしたのか、理解することが難しかったので、あえて作品研究に挑んだ。

この作品は、ある青年の自殺、という事件を主題とした作品である。何故青年が自殺することになったのか、という点に作者の趣旨があるように思った。それで、この作品の主題、及び作者の趣旨を解読するために、シーモアの自殺の原因に照準をあてて考察した。そして、自殺の原因を解明するために、シーモアがいかなる人物であるかを追求した。なぜなら、自殺した当人の性格や、当人を取り巻く状況に自殺の原因が隠されているからである。以上の利用から、さらに、作者はシーモアをどのような人物を設定しているのか、という点を考察することにした。

また、この作品の連作である「大工よ、屋根の梁を高く上げよ」、「シーモアー序章ー」も、シーモアの人物象を研究するための参考にした。

研究を続けると、自殺したシーモアとは知的な人物であり、繊細で感性が鋭く、神経質な性格であることがわかった。そして、シーモアは妻や妻の両親と不仲であり、世間一般の人々の事を貶していた。これらの事が、シーモアが自殺をした原因と考えられた。

研究の結果、シーモアは、物の内面や本質を重視する人物であり、ファッションに興じる人々を愚かだと考えた。作者もまた、虚飾のはびこる社会を非難しているのである。そして、シーモアがこの世の中で絶望して自殺したように、作者もまた、この社会と人々に対して絶望しているのだと思う。そして愚かな人々より、シーモアの方がまともな人間だと考えているのである。

（指導教員　中村　敦志）

Eagar Allan Poeの恐怖小説

柿崎　拓

悲劇的な一生を送ったEagar Allan Poe。彼の作品は、死、幻想、冒険などをテーマとし、その全てに美を追求している。

Poeの作品を分類すると、物語、詩、批評の３つに分けられる。私はこの中で物語、特に恐怖小説呼ばれるもの３つを研究した。“Black Cat” “Willian Wilson” “The Tell Tale Heat”がそれである。これらの小説は、四と狂気が存在し、また幻想の世界が支配する、Poe独自の美的物語である。

美と私は書いたが、Poeのいう美とは何を意味しているのか。彼は何を追求したのであろうか。Poeの作品を考えることは、彼の美の意識を解くことに他ならない。私は美に焦点をあて、研究を続けた。その結論は次に述べるとおりである。

恐怖小説における美とは、死を意味している。Poeは死というものを恐ろしく、しかし、それ以上に美しく描いている。死とは本来、人に好かれるものではない。それは急に、不意に、もしくは徐々に人の身を覆い隠してしまう形のない恐怖の対象である。Poeは死を、与えられるものではなく、自ら願望するものとして、そこに美を見い出している。

生があれば、死もまたある。Poeはこれらの両立を前提とし、死を身近な存在として描きあげている。彼の作品のおける死とは、人がただ漠然と死に向かっていくのではない。人は生の中で罪を犯し、その罰として、自ら死へ向かっていくのである。その過程には理性と狂気が交互に存在し、狂気に対する罰が死なのである。もちろん、狂気に罰を与えたのは他の誰かではない。それは本人の理性である。

結局Poeは人の心を探研し、してはいけないからこそしてしまう、天邪鬼の心持を見つけだしたのだろう。この心持の行きつく先は死である。この心持はまた、およそ誰の胸に底にもひそんでいる怖いものであり、恐怖小説の名はここから発しているのではないか。

Poeの恐怖小説とは、肉体的な死ではなく、精神的な死の中に美を追究した、独自の世界の物語である。また、死とは、罪を浄化するものとして考えられるだろう。

（指導教員　中村　敦志）

キリマンジャロの雪

工　藤　健　治

“キリマンジャロの雪”に見た世界は、主人公ハリーが死の食前に何かを追い求めたものの行きつく世界であった。

獲物を追い求め、キリマンジャロの頂上近くに倒れていた。豹の姿と同様に彼の作家であろうとする精神、死の直前まで小説を書き続け追い求めた姿は、決して腐敗することなく永久に存在するのである。

彼の追い求める姿は、アフリカ最高峰の、マサイ語でNgaje Ngaj神の家と呼ばれ神聖なものとして象徴されるキリマンジャロの頂上にたどりつくことで強調されている。いいかえれば、彼の追い求める姿をキリマンジャロという神聖な鏡にうつしだすことで読み手に知らせているのである。つまり彼の何かを追い求める行動は神聖なものであり、肉体消滅を越えたところに価値があるのである。

肉体の消滅を象徴するものは雪であり、雪は神聖なキリマンジャロの頂にあり美しく輝く。雪は「死」と「美しさ」を読み手に示しているのである。雪の美しさや死を導くものは、致命傷を負い死をベッドで待つ主人公ハリーの回想から読みとれる。彼の回想は5つあり、それぞれの彼の小説であり、彼の人生の断片として紹介され、半日という短い時間に、5つの回想を含め時間の総量を加えている。

「死」と「美しさ」を象徴する雪と、「神聖」を示すキリマンジャロを舞台に、彼は回想の中で行動する。彼の行動は、小説を死の直前まで追いかけることであり、作家でいようとすることである。これはちょうど、獲物を追いかけなければならない豹が、豹でいようとするためにキリマンジャロの頂上近くまでのぼりつめた姿と同じなのである。

そして彼が作家として追い求めたものは、死ぬ間際に見たキリマンジャロの頂上に輝く美しい雪の世界に形容されるのであった。死への恐怖を乗り越え、作家として死のうとする精神は、肉体と死を超越した世界つまり、死の平面を離れた人間の精神的解脱の世界へと導いたのである。

（指導教員　中村　敦志）

テネシー・ウイリアムズ『ガラスの動物園』
――再現できないガラスの家族――

才　村　雅　志

『ガラスの動物園』は、トム・ウィングフィールドがセントルイスでの生活を思い出す追憶の劇である。彼は、母親のアマンダ、妹のローラと暮らしていた。父は家を捨てて、行方がわからなかった。アマンダは南部気質の女性で、子供達を自分が望む社会水準に保って育てたいと考えて、努力していた。ローラは内気な、軽いびっこの少女で、ガラス製の動物像を集めて、その世界に耽っていた。そんな彼女のためにトムは、工場の同僚ジムを夕食に招く。高校生の頃からジムのことを知っていたローラは、あらためてジムに好意を抱く。ジムはローラの繊細さに引かれたかのようである。ところが、ジムはすでに婚約者がいることを告げて、帰ってゆく。アマンダがローラを慰めるパントマイムを背景に、トムは、父と同じようにこの家を棄てた、と観客に語る。けれども、ローラの思い出にたえずつきまとわれて、彼は決定的にこの家庭から逃れることができない自分を語るのである。

このように、家庭の崩壊、孤独、新旧ニフの生き方の相克、これに幻影と現実との対立といったことを扱っているこの作品は、ウィリアムズの長所と同瞳に短所をよく表しており、このことからも、ウィリアムズの本質を把握するのに好都合な作品である。ウィリアムズはこの作品で、四人の登場人物の生活の決定的な瞬間を捉え、それに強い光をあてて、それぞれの人物にとっての人生の深淵を描いてみせてくれるのであるが、そういった人物を繊細に描いて、しかも、かなりの説得力を持っているのは彼の大きな功績である。

物語は、彼ら家族が引き離されてしまった現実世界からやってきたジムによって、彼らが生きるガラスの世界は、こなごなにくだかれてしまう。トムはローラの幻想をひきずり、もと元へは戻らないガラスの家族の思い出を消しさりたい。こなごなになったガラス細工を照らすろうそくを吹き消したい。

――だっていまは、すさまじい稲妻が世界を照らしているん！そのろうそくを吹き消してくれ、ローラ
――そして、さようなら……

（指導教員　中村　敦志）

『裸者と死者』における人間的心理

佐　藤　佳　美

私が所属した専門ゼミナールでは、文学作品について調べることが目的でした。最初に私が選んだのは短編だったのですが、これはあまりにも短すぎて一度のレポートでほぼ終えてしまいました。それで次は長編を読んでみようと考え選んだのが、このノーマン・メイラーが書いた『裸者と死者』(1948)でした。ただこの本は逆にあまりにも長すぎて、すべてを読み終えて自分の考えを文としてまとめようとすると収拾がつかなくなったために部分的に抜粋してレポートを書きあげました。この物語の舞台はおそらく太平洋上の孤島です。おそらくというのはこの島の名前が作品中に書かれてはいても、所在地ははっきりとかかれていないためです。ただ、この作品は日本軍とアメリカ軍とが戦闘状態であるという設定ですから第二次世界大戦中の物語であることは間違いありません。作者自身、従軍経験があり占領下の日本にも軍人として着たことがありますが、作品中での日本軍はあくまでアメリカ軍の対戦相手でしかなく日本人個人の描写はほとんどありません。その上、アメリカ軍側も人間描写の方が多く書かれています。そのためにこの作品は戦闘を主体とした物語ではなく、戦時下の人間心理を主体とした物語となっています。そのため私が書いたレポートでも登場人物たちの心理を主体に、特にハーン少尉とクロフト特務軍曹の二人を取り上げて書きました。他にも登場人物は大勢存在し、それぞれの心情も過去も描かれているのですがすべてを取り上げるわけにはいかなかったのでこの二人を中心に書きました。そもそもこの作品の中にはそれぞれの登場人物の過去が性質を詳しく書いた章が所々に挿入されています。けれでもこれがかなり長く書かれていたり、あまりにも本文から独立した物語として存在するためにかえって本文の流れをさえぎっているような感じがしました。確かに登場人物たちの性格設定や生活環境を書くことはある程度不可欠だとはいっても、この作品ではかえって読みにくいものとしてできあがっています。最後のこの作品の題名である『裸者』と『死者』が何を指しているのかを自分なりに定義した結果は、一言で表すのなら戦場において存在するもの。つまり『死者』とは死人そのもので、『裸者』とはまだ死人になっていないものであり、自身の存在を守ることにのみ執着しているものではないかと考えます。本来、戦争には敵と味方がありますが、この作品の登場人物たちを見ると、彼らは敵である日本軍に勝つことより、自らを守ることにのみ執着しています。それこそ人間として存在するために必要な理性を捨て去り、感情を剥き出しにしている彼等を作者は『裸者』という言葉で表したかったのではないかと思えます。『裸者』も『死者』もすでに人間ではなく、そのようなものしか存在することを許さない戦場というものがいかに悲惨であるかを作者は述べたかったのではないでしょうか。

(指導教員　中村　敦志)

Anne Beattieと現代アメリカ

竹　澤　賢　晃

アメリカ現代文学の持つ独自性とその時代背景を、Ann Beattie著の "Where you'll find me" を通して考察し、近代から現代にかけてのアメリカの「本当の姿」を探求していく。

第一章　Ann Beattieの作品の特徴

1．Ann Beattie　2．映像的な表現　3．上層中産階級

新進の女流作家としての今日のアメリカ文壇を揺り動かしているAnn Beattieは、彼女の個性的な文体から短篇の名手と謳われ現代アメリカ文学を代表する作家の一人である。第一章では、物質的に満たされた生活とどこか空白感の漂う自己の内面との交錯を淡々とした文体で描くという特徴をもつ彼女の素顔に迫る。

第二章　"Where you'll find me" の解釈

1．あらすじ　2．兄の秘密　3．私の秘密　4．秘密の告白　5．裁判所の象徴

この作品は、主人公の私と兄のフランクがお互いに秘密を告白しあい、自分自身の心の中の葛藤を整理した上で、自分自身の心の中の「本当の気持ち」を追求していくといったストーリーである。第2章では野良犬の存在、裁判所の象徴、また『オズの魔法使い』から引用されている詩の意味などのいくつかのキーポンイトを踏まえながら、ストーリーの真意に迫り、要約していく。

第三章　Ann Beattieの作品を通して近代から現代にかけてのアメリカを探る

1．豊かなアメリカ　2．カルチャー・レボリューション　3．おわりに

第二次世界大戦後、超大国アメリカの経済は安定した情勢が続いたが、ベトナム戦争の反戦運動、公民権運動などといった様々な運動が合流し、それまでアメリカの道徳規範とされていた中産階級の価値基準全体が審判にかけられた。このような激動の60年代をさかいに、アメリカは確実に変化した。第三章では、アメリカは具体的にどのように変化したのか、また、その変化の後のアメリカの価値基準、さらにアメリカの真の姿をAnn Beattieの作品と関連づけて追求していく。

（指導教員　中村　敦志）

ジョエル少年に見た精神的成長の持つ意味

――カポーティ　『遠い声　遠い部屋』――

田　沼　幸太郎

主人公ジョエル少年は、ニューオリンズに母親と二人で暮らしていたが、その母を亡くし遠い離れたランディングの地に住む父親をたよっていく。まだ精神的にも肉体的にも幼ないジョエルだが、一人で旅をし、いろんな人との新しい出会いによって、段々と精神的にも成長していく。その中でも、ランディングに住む双児の姉妹の妹・アイダベルとの出会いは、ジョエルに与える影響を大きかった。アイダベルの性格は、気の強い男まさりといったものだった。ジョエルは最初、アイダベルのその気の強い性格がどうも気に入らないようだったが、内に秘めた優しさを見つけた時からだんだんと引かれていく。

一方、父を尋ねて来たジョエルだったが、何だかんだ理由をつけられ会わせてもらえない。だんだんといらだちを感じていくジョエルにとって、心の安らぎを求めるあてはアイダベルといっしょにいることだけだった。そして、心身ともにだんだんと強くなっていく。

ようやく父親に会える日がやって来た。今までいろんな想像をして父親の姿を思い浮かべてきたジョエルにとって、成長しているとはいえ、緊張して手の震えがとまらないほどになってしまうのは仕方のないことだった。そして対面。父は、身体はまったく動かず動く目をもつ像といった感じだった。それまで、父の姿を思い描いていたジョエルにとって、その現実はとてつもなく大きなショックを与えるには十分すぎた。しかしジョエルは、ショックを押さえ立ち向かっていく。何とかそんな父を好きになろうと努力をする。そんなところにも、ジョエルの精神的な成長がうかがえるだろう。しかし、ジョエルの心に安らぎを与えることはできなかった。やはりジョエルの心をなごませるものは、アイダベルだけだった。父に対するショックとまわりの人々の態度に、何か煮え切らない気持ちでいたジョエルは、彼女の夜逃げの計画に迷いながらも乗るのだった。彼の心の中の葛藤は、安らぎを求めることが強かったのだ。これらの数々の出会いや事件は、子供っぽい性格を残した人間の姿を、強い精神を兼ねてそなえた大人に育てあげていくという一つの例だろう。しかし、精神的に成長し強い心を持てば、何事にも立ち向かっていけるという反面で、幼く純粋ですなおな心を、だんだんと失っていくというさびしさを同時に心の中のどこかに、つくりあげてしまうのではないだろうか。

（指導教員　中村　敦志）

アンダースンについて

三田村　　環

シャーウッド・アンダースンは、オハイオ州の田舎町で生まれた。馬具製造業者の父親は酒好きで放浪癖があり、そのため働き者の母親は苦労をしたらしい。

1895年、母親が結核で他界すると、別の町で小さな会社を経営するまでに到るのだが、創作への意欲が次第に高まり、1913年、会社を放棄し、シカゴへ出、元の会社に戻った。

その頃シカゴは産業発達による急速な都市化の最中で、それに伴う労働問題や農村人口の流出問題、更に大量生産や交通の発達で画一化せられるアメリカ文化や、田舎町の独善的な閉鎖性など、社会文化上の問題を抱いていた。そうした背景の中、シカゴ・ルネサンスと呼ばれるシカゴを中心とした文学的気運が生れ、彼はこのシカゴ・ルネサンスの渦中で文学的啓蒙を受けたのだった。

さて、彼の作品の特徴は、何と言ってもグロテスクだろう。一言で言えばそういう事になる。彼は人間の誰もが持っているグロテスクさに焦点を合わせて、簡潔な筆で印象的な色彩豊かな人間像を描いてみせている。全体、彼の作品の主人公は孤独であり、畢　人生に於ける失敗者である。それらの人々は手工業から機械工業への過渡期に於て、その様な時代の流れについて行けなかった人達である。実際彼自身、工業化された以後のアメリカ人が描けなかったのだ。

彼は幼き頃から雑多な読書はしていたものの、正規の教育はあまり受けておらず、その事に対し、劣等感を抱いていた様でもあるのだが、その事も彼の限界に関与しているのかも知れない。

彼は畢　、産業化の過渡期の作家であり、この時代でなければ、彼も創作意欲をかきたてられはしなかったろう。

彼はなんらかの挫折を味わった人達、心のどこかに傷を負っている人達、時代の敗北者、孤独者、要するに内的な屈折を経て、噛みしめれば味わいの出てくる様な人物を、理解と優しさを持って、然も淡々と描いているのである。

ともかく彼の『ワインズバーグ・オハイオ』やその他の諸短篇がアメリカ文学を語る上でも重要な地位を占めている事は、後のヘミングウェイやフォークナーに与えた影響から見ても否めない事実である。

（指導教員　中村　敦志）

『グレート・ギャツビー』を通して考えるスコット・フィッツジェラルド

村　瀬　夕　子

スコット・フィッツジェラルドの小説には、不思議な魅力がある。それは、最初の1ページから、強烈な文章でひきつけるようなものではなく、回を重ねて読んでいくごとに、じわじわと魅了されていくという小説である。

『グレード・ギッツビー』も、そんな小説のなかの一つであり、フィッツジェラルドの代表作である。主人公であるジェイ・ギャツビーと、彼を客観的にみるニック・キャラウェイを通して、フィッツジェラルド自身の姿が見えてくる。

フィッツジェラルドは、物質的なものに対する憧れや、繁栄の裏にある虚しさ、絶望的な敗北感、崩壊の中からの希望といったテーマの小説が多く、また、これらの自分自身が、体験してきたからこそ生かせているのだと思う。

1920年代の好景気から大恐慌へという時代に、フィッツジェラルドは生きていた。長くは続かなかったにしろ、「文学的成功」を手に入れ、華やかな生活を送っていたこともあったが、心の中は、いつも充たさぬ想いが残っていた。フィッツジェラルドは、はかない物質文明の中に、永遠的な何かを求めていたのだ。

それは、『ギャツビー』に象徴されている。ギャツビーは、「アメリカン・ドリーム」の成功者であり巨大な富を築き上げた。しかし、ギャツビーが、一生を通して『本当に欲しかったもの」は、とうとう手に入らないまま死んでいった。

「夢」に破れ、フィッツジェラルド特有の、喪失感や絶望感が、ここにも現れているが、それは決して悲劇的ばかりとは言えない。フィッツジェラルド自身が味わっていたように、人生においての夢の崩壊というものは大きなものであるが、フィッツジェラルドは、そこを原点としているのではないか、と思う。

崩壊と相反する栄光が、始まりではなく、栄光から崩壊へ、そして「無」という状況になったときにそこから始まる「何か」を、表現したかったのではないだたろうか。

アメリカ、特にニューヨークという街に対する郷愁を強く感じるが、結局フィッツジェラルドは、街にも、時代にも同化することはできなかった。

『ギャツビー』の結末にあるように、「絶えず過去へ過去へと運び去られながらも、流れにさからう船のように、力のかぎりこぎ進んでいく」ことが、フィッツジェラルドの一生を象徴していると思う。

（指導教員　中村　敦志）